

月刊

# いじろのとも

第九卷

四月号

## 自分の中を探す

ここ五十年の  
学校教育は  
自分の外を  
さがすことしか  
教えて来なかつた  
真理は  
自分の中にしか  
ないというのに

それはあたかも  
失われたものが  
くらいところになし  
無いのに  
あかるいところばかり  
さがしている  
ようなもの

## 平等の天秤

平等の天秤を  
社会（他己・友愛）に  
傾ければ  
自由はなくなり  
個人（自己・自由）に  
傾ければ  
友愛はなくなる

## 共生と響生

共生  
バラバラな  
個の生き方

響生  
こころもつた  
人間の生き方

# 人生を考え直して

## みたい人は(五二)

『聖書』解説(二二八)

マタイ福音書の第七章を続けます。

一三 狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は  
大きく、その道は広いからです。そして、そこからは  
いつて行く者が多いのです。  
一四 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、  
それを見いだす者はまれです。

文章自体に、難しいことはありません。でも、どの  
解説書を読んでも、満足に書けていると思えるもの  
は無いようです。

整理してみますと、一方には、「いのちに至る門」小  
さい門・狭い道・見いだす者がまれな道」があり、他方  
には、「滅びに至る門」大きい門・広い道・入って行く  
者が多い道」があるということになります。

こう整理してみますと、この文章で一番大切なことは  
は、「いのちに至る門」と「滅びに至る門」だというこ

とが分かります。これらのことばさえ理解できれば、残  
りは自然に分かるものばかり、と言えるのです。

では、「いのち」と「滅び」とは何のことなのでしょう  
うか。誰でもが、いのちがあるうちは生きていますし、  
いのちがなくなれば、死んで滅んでいくということです。  
なのに、一方は、いのちに至る門、他方は、滅びに至る  
門ということですから、滅びに対応させた「いのち」は、  
滅ばない「いのち」でなければならぬということにな  
ります。

そうなのです。滅ばないいのちに至る道が、いのちに  
至る道なのです。では、滅ばないいのちとはどんなの  
ちなのでしょう。それが、どの解説書を見ても書かれ  
ていません。

それは、仏教で言いますと、ニルヴァーナ・解脱であ  
り、キリスト教で言いますと、神の国を自分の心の中に  
実現することです。これまでに出了たことばで言いますと、

第七卷十一月号で解説しました第五章二 節にありま  
す「天の御国に入る」とか、 第八卷四月号で取り上げ  
ました同四五節の「天におられるあなたがたの父の子ど  
もになれる」とか、 同四八節の「天の父が完全なよう  
に、完全である」とか、ということになると思います。

このような滅ばないいのちは、現実の生命が滅ばない

人はどこにいないわけですから、現実のいのちのことでありません。ですから、それは、心のありようのことなのです。つまり、宗教的に実現した境地のことなのです。それをことばで表現することは、難しいのですが、既に引用しました巻号で述べていますように、お大師さんで言いますと、即身成仏ですし、老子で言いますと、無為而無不為ですし、ソクラテスで言いますと、無知の知ということになります。

実際の気持ちですが、例えば、もう既に過去から永遠に生きてきたように思えるということですし、将来、いつ死ぬのかとか、死んだらどうなるのか、といった死をめぐる問題が全く気にならなくなるということですよ。言い換えれば、現在に何も不満がなく、すべてに満たされているということですよ。生きているだけで、いのちの喜びが湧き出てくるということなのです。

ですから、自分のために生きる人生は、もう不必要だということですよ。ということは、難しいかも知れませんが、自分が生きることが、すべて他者が生きることでもある、ということなのです。それは、自分の現実の生命は滅んでも、他者のいのちを通じて、永遠のいのちに達しているということなのです。

この一三節で述べられていますように、こうした境地

に至る門は、小さく、その道は狭く、見いだす者がまれだ、といえるのです。道が狭いとは、修行・精進が必要だということですよ。聖書やこの解説を読んで理解したから、そうなれるわけではありません。キリストとその教えを信じて、キリストが言われるように、毎日まいにち、ひたすら、一人で静かに祈らなければならないのです。一般的に言いますと、瞑想しなければならぬのです。そうするという困難な門をくぐって、そうした境地に至るまでそれを継続できる人は滅多にいないのです。

多くの人は、自分の生理的な生命の終わりが、自分の「いのち」の滅びである、広い、安易な道を、日常の中で、自分の欲望に流されて、歩いているのです。

では、永遠のいのちの境地に至る人が滅多にいなければ、多くの人は宗教に無縁のように思われるかも知れませんが、そうではありません。至ることが出来なくても、キリストとその教えを信じ、ひたすら毎日、お祈りをしているとき、人は誰でもキリストに限りなく近い境地に至ることができると言えます。

現代人は自己が肥大して、他者との交渉が殆どの場合、「取引」になってしまっています。神との交渉もそうなっているのです。ということは、キリストとその教えをひたすら信じていくことができなくなっているのです。

## 自作詩短歌等選

### 徳目と修行

政治家が  
うそをつくの  
は  
当たり前  
どこかが狂つては  
いないかねえ

うそつくは  
どろぼうさんの  
はじまりと  
むかしは教え  
いまカッコよさ

### 義務の土台

義務は  
字のごとく  
義に努めること  
でも  
こころの土台が  
無ければ  
努められない

それは  
あたかも  
砂の上に  
建てた家が  
もろくも  
崩れさる  
ようなもの

### 空っぽと満タン

教育は

自分を空っぽにすること  
を

教えない  
知識を満たすこと  
感覚を満たすこと  
欲望を満たすこと  
のみを教えている

子どもに  
あたまで徳目

教えても  
ただそれだけで  
守れない  
教えとともに  
修行課せ  
修行もさせず  
守れるのなら  
大人はとうに  
聖人ばかり

### 自己愛と他者愛

恋愛は自己愛

互いに

奪い合うもの

慈悲は他者愛

互いに

与え合うもの

でもいま

これが消えている

恋愛は

同性愛

会社愛

郷土愛

民族愛

などなど

世俗な愛の

代名詞

## 勝手な民主主義

自分は

平気で割り込みをする

なのに

ひとにはそれを許さない

日本では

自由とは

他者への

無制限な甘え

日本はもともと、他己社会。お互いにこころを通わせあ  
って生きてきた。談合は、今は悪い意味で使われている  
が、かつてはそうではなかったのではないか。顔を合わ  
せて、お互いに無理なことを言わないで、譲り合い、許  
し合い、甘え合って、ものごとを決めたことを表す言葉  
ではなかったか。死ねば、お互い誰でもが「ほとけ」に  
なる、どちらかと言えば「平等」な社会。

民主主義が育ったヨーロッパは、人間同士ではなく、  
神と人間との関係が第一。本音よりも、建前が大切な社  
会。死んでも神の審判を仰がなければならぬケジメの  
厳しい社会。欧米では、未だにキリスト教が信じられて  
いる。

これは、信仰が失われた日本と全く異なっている。ま  
た、日本は、建前よりも本音が大切な社会。頭には、民  
主主義が入ってきてても、キリスト教的精神構造までは入  
ってこなかった日本。いま、元来もっていた「ほとけ」  
を失い、「こころ」を失って、それによつて、もともと  
もたなかった、正義としての民主主義的建前がその基礎  
を失い、エゴ（自由）のみが残って、精神が空洞化して  
いる。この詩は、そのことの表現。

## 宗教滅ぼす

## 修羅となる

人さまを

自己への執着が

救うと思ひ

あらわになるとき

ごさかしく

人間は

教えをたれて

修羅となる

宗教滅ぼす

# 自作随筆選

## 心の教育中間報告

三月三十一日に、例の「心の教育のあり方」に関して中教審が、中間報告を公表しました。翌日四月一日の毎日新聞で、その内容の要旨が紹介されましたが、先月号の後記に書きました骨子案と、当然ながら、大筋は同じでした。

その中で、外国との比較データが新たに公表されました。目立ったのは、日本の父親が世界（日本、韓国、タイ、米国、英国、スウェーデンの六カ国の中）で一番子どもと一緒に過ごす時間が少ないこと、子どもの成長についての親の満足度が日本が一番低いこと、高校生の規範意識についての日本、米国、中国の三国の比較調査で、以下にあげますような質問項目で、「本人の自由でよい」とする高校生の割合が、日本で比較を絶するほど高いこと、などです。

先生に反抗すること

(日 79.0%、米 15.8%、中 18.8%)

親に反抗すること

(日 84.7%、米 16.1%、中 14.7%)

学校をずる休みすること

(日 65.2%、米 21.5%、中 9.5%)

売春など性を売り物にすること

(日 25.3%、米 (調査せず)、中 2.5%)

このデータをなるほどと思うと同時に、おそろしいことだと思えました。日本の子どもたちが、世界で一番、こころが荒れている（他己が弱くなっている）ことを裏付けるデータのように思われます。

この報告のもとになった「骨子」についてのコメントは、先月号の後記で紹介しました論文、「こころの教育論」で書きましたので、ここでは省きますが、四月二日付けの毎日新聞に載った「心の教育」と題する社説について一言、コメントさせて頂きます。

この社説の見出しに「焦点がぼやけてしまった」とあり、報告を殆ど評価していません。その点は私も同感でよいのですが、社説の中に次のような文章がありました。

「中間報告がいうように、根本的には、大人社会全体のモラルの低下を問い直すこと、企業中心社会から『家庭に優しい社会』への転換をめざすことだろう。しかし、実際に取り組むのは、個々の大人、家庭、企業である。

その価値観、そして社会構造そのものにもかかわること

だ。いかに国の審議会とはいえ、個人の意識改革を強要するわけにはいかない。堂々巡りの感が強い。」

驚きです。毎日新聞論説委員（世間の人たちの代表）

の現状認識の甘さを見る思いがします。事態はもつと深刻です。個人一人ひとりの一大意識改革なくして、いまの子ども、いな学校、いな「日本の将来」を救うことは不可能です。子どもが病んで育つのは、大人や社会が病んでいるからなのです。

同社説は、この引用に引き続いて「中教審が影響力を持つのは教育の分野になるが、寄せ集めの第4章（心を育てる場としての学校を見直す）はとりわけ精彩に欠ける」としてはいますが、「心の教育」に関して、学校や教師が頼りにならないのは、親や社会が頼りにならないのと同じ程度なのです。何も、教師が特別な人間ではありません。学校だけが特別な社会ではないのです。

日本の高校生に欠けていた規範意識は、学校の教育だけでそうなたたものではありません。そうした規範意識は、実は小学校へ入るまでの乳幼児期にその基本が形成されます。それには、子ども自身を大切に思う親の愛と、それに基づく厳しいしつけが必要不可欠です。この二つを、今の日本人は欠いています。つまり子どもは自分が育ててやるのだという愛とその認識を失っているのです。

## 学者の老子理解

先日、福永光司著『老子に学ぶ人間学 ビジネスマンの道の哲学』（富士通経営研究所刊）を古本で買ってきました。その中に『老子』の第五章が取り上げてありました。その始めの二節は「天地は不仁、万物を以つて芻狗と為す。聖人は不仁、百姓を以つて芻狗と為す。」となつています。なお、芻狗（すうく）とは、祭りの時、厄払いに使い、用が済めば捨てられる、わらで作られた犬のことだそうです。

この訳は、次のようになされていました。「天地は無慈悲で、万物を藁（わら）の犬ころのように扱う。聖人は無慈悲で、万民を藁の犬ころのように扱う。」

また、解説の中に次のような文章が見えました。「老子の『道』は、人間を愛することもないかわりに、憎み憤ることもありません。人間社会のいかなる悲惨に対しても救いの手をさしのべようとはせず、人間のどのような慟哭（どうこく）と嗚咽（おえつ）の声にも耳をさそうとしない。」

この著者・福永光司氏は、中国哲学の専門家で、京都大学の哲学科を卒業され、東京大学教授から京都大学人

文科学研究所長をつとめられ、現在は郷里の大分県中津市で悠々自適の生活をされています。

でも、この老子の解釈に、私は驚きました。老大家にしてこれなのか、と思ったからです。すぐ、書庫に持っている老子の解説書を何冊か取り出して確認してみました。確かに、訳は、これまでの定説に従ったものでした。

でも、この訳では、老子の真意からほど遠いものになっていると思います。では、老子は、果してどんな気持ちでこう言ったのでしょうか。以下少しだけ、私の私見を述べてみたいと思います。

まず、「天地は不仁」、「聖人は不仁」というときの「仁」ですが、これは、孔子で確立しましたが、中国人の最も基本的な人生の徳目で、自己を制して他者を尊重する（愛する）ことをいいます。

さて、「天地は不仁」であって、「万物を以って芻狗と為す」ということですが、訳してみますと「天地（自然）は、人間の価値基準である仁というようなことを眼目において動いているのではなく、万物は、それぞれが相互相依の中で発生し、発展し、消滅していくのです。そこに特別ななからはありません。」となるように思っています。

次に、「聖人は不仁、百姓を以って芻狗と為す。」と

いうことですが、「聖人も同じように、人間の仁といった価値に執らわれているわけではありません。それを超えていて、しかも、その価値を体得しているのです。ですから、自ら百姓にあまんじて、命（を）はじめあらゆる（価値）に執らわれることもなく自然のままに生き、お迎えがくれば、有り難くいくことができるのです。」となるように思います。

既に引用しました、福永氏の解説をもう一度あげますと「老子の『道』は、人間を愛することもないかわりに、憎み憤ることもありません。人間社会のいかなる悲惨に対しても救いの手をさしのべようとはせず、人間のどのような慟哭（どうこく）と嗚咽（おえつ）の声にも耳をかそうとしない。」ということですが、まったく違っていると思います。

老子の「道」は、仏教で言えば「解脱の境地」のことです。涅槃寂靜の境地のことです。その境地は、大慈大悲、愛の権化の世界です。人間をどこまでも愛してやみません。他者の悲しみを自らの悲しみとし、他者の喜びを自らの喜びとするのです。ただ、凡人と異なるのは、そのことに執着しないだけです。その執着しない態度が愛がないように見えることがあるかもしれませんが、決して真実はそうではないのです。

# 釈尊のごとば（六七）

法句経解説

（二三一）身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いを捨てて、身体によって善行を行え。  
 （二三二）ことばがむらむらするのを、まもり落ち着けよ。ことばについて慎んでおれ。語（ことば）による悪い行いを捨てて、語（ことば）によって善行を行え。  
 （二三三）心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いを捨てて、心によって善行を行え。  
 （二三四）落ち着いて思慮ある人は身をつつしみ、ことばをつつしみ、心をつつしむ。このようにかれらには実によく己れをまもっている。

格別に難しいことばはありません。

前の三つの偈は、順に、からだ、ことば、ところが、むらむらするのを、まもり落ち付けなさい。それらを慎んでおりなさい。それらによる悪い行いを捨てて、善行を行いなさい、ということを行っています。

最後の偈は、これら三つの偈をまとめています。こうした三つの偈をまもっている人は、落ち着いて思慮ある人で、よく己れをまもっている人だということです。

さて、以後、この偈と私の理論との関連や私の理論による解釈をして行きたいと思えますので、少し理屈っぽくなって恐縮です。もし、退屈な方は、いい加減に読んで下さい。

三つの偈に出た「からだ」と「ことば」と「ところ」は、仏教では、身業（身体的行為）、口業（言語表現）、意業（心意作用）の三業と呼んで、人間の行為を分類する基準としています。

また、私の「人間精神の心理学モデル」では、精神の働きは、次のような五層から成っているとされています。

たましい（自我 人格機能）	
あたま（認知 言語機能）（口）	
からだ（感覚 運動機能）（身）	意識領域
こころ（情動 感情機能）（意）	
ずいしき（生命 如来機能）	無意識領域

なお、カッコの中は、前者が自己の働き（弁証法的運

動契機)、後者が他己の働き(同)を表しています。また、先ほどの三業との対応ですが、表をご覧いただければお分かりのように、からだところはそのまま対応しています。ことばは、私のモデルではあたま(認知言語)に対応しています。

ところで、私のモデルには、対応しないものが、二つ残っています。それは、一番下に位置する無意識領域のずいしきと、一番上に位置する意識領域のたましいです。

まず、無意識領域の「ずいしき」は、無意識でのことです。行動としては直接には関連がありません。ですから、対応がなくても当たり前といえます。ただ、ヨーガの修行の結果、解脱に至った心(精神)に付いての考察では、仏教(唯識思想)は、深層心理としての第七識(末那識「まなしき」)や、第八識(阿頼耶識「あらいしき」)を仮定しています。私のモデルのずいしき(生命-如来機能)は、それをより体系化したものです。これについては、いずれ、唯識思想と如来蔵思想との統合をめざして、論文を書きたいと思っていますので、そのとき、詳しく検討したいと思っています。

次に、対応がなくて残っている意識領域の「たましい(自我-人格)」ですが、この働きは、それ以下の働きの統制・組織化・目的統合・モニターなどを司っている。

ます。この偈に即して言いますと、何らかの悩みや苦しみを解決するために、これらの偈を読もうともくろみ、それらをあたまで理解し、こころでまもろうと誓い、実際にからだで実践するという、偈をめぐる、動機付け、目的の設定、実際の行動の指揮・遂行、その結果の評価などをする働きだと言えるのです。ですから、個々の三つの働きを関連付け、統合し、一貫性を持たせる働きといえるのです。

もう少し一般化して、具体的に考えてみたいと思います。例えば、人生は何のために生きているのか、といった生きる目的や意義などの設定にも関わっていると言えます。ある人は、現代人の多くがそうですが、自分の欲望(食欲、性欲、優越欲)の追求に生き甲斐を感じているでしょうし、ある人は、自分の感覚・運動的な音楽や絵画や伝統的な技術・技能などの完成に生き甲斐を求めているでしょうし、また、ある人は、自分の学問や文学などの完成に精進しているでしょう。また、ある人は、自分を制して他者をたてることに人生の目的を置いているでしょう。このような大きな人生の生き方に関わる目的の設定から、さらに具体的に、夕食に何を食べようか、とか、今晚はお風呂に入るかどうかどうしようかとか、お花見にどこへ行くかどうか、といった日常的な行動の計画

や実行などもすべて、この働きと言えるのです。

その時、過去の知識や経験が生かされますし、今の自分の能力や経済力や体力や時間的余裕、あるいは他者との関係やそこがどんな町なのか村なのかといった環境的な制約など色々な条件に応じて行動が決定され、遂行され、反省されるというわけです。

さて、偈に戻って、もう少し解説しておきたいと思いません。

これらの四つの偈は、実は、仏教の真髓を述べています。もう何度も書きましたが、仏教思想を一偈に表現したものに、七仏通戒偈というのがあります。それは、漢語では次のようになります。

諸悪莫作（しよあくまくさ）

衆善奉行（しゅぜんぶぎょう）

自淨其意（じじょうごい）

是諸仏教（ぜしよぶつきょう）

日本語に訳せば、「もろもろの悪をなさず、すべての善を行い、自分の心を浄めよ、これが諸仏の教えである」となると思います。

ここで取り上げています偈も、身口意の三業をまもり、慎んで、悪い行いを捨て、善い行いをせよ、と語っています。「身口意の三業をまもり、慎む」ということが、

七仏通戒偈で言いますと、自淨其意（自分の心を浄めよ）ということになります。

最後に、私がかつて、「人間の業の深さ」と題して作り、「このころのとも」の第一巻六月号に載せた詩を紹介して終わりたいと思います。

多くの人は

行つてはならないことを行い

（不殺生・不偷盗・不邪淫）

行わなければならないことを行わない

言つてはならないことを言い

（不妄語・不綺語・不悪口・不両舌）

言わなければならないことを言わない

思つてはならないことを思い

（不慳貪・不瞋恚・不邪見）

思わなければならないことを思わない

人の業のなんと深いことよ

ヨーガをしよう

そして業から救われよう

後記

一、三月十九日、お彼岸の前日に、明治初年、廃仏毀釈令でお取り潰しにあつた城林寺のお墓が荒れ放題でしたので、傾いたものはそのままに、ざつとですが、掃除をさせて頂きました。そして、お彼岸にお参りし、理趣經をあげさせて頂きました。なお、城林寺は、お墓を直させて頂いた「増観」さんが所属されていたお寺です。

二、先日、かつて山城町で親しくして頂いていた、ある読者の方・Ｔさんが特別養護老人ホームに入っておられるとの話に接し、確認ののち、お訪ねしました。

三、そのＴさんは、現在九十歳ですが、実子がなく、奥さまもずっと前になくされて、一人暮らしでした。病院で足を踏み違えられて転び、腰の辺りを骨折されて手術をうけられ、お訪ねしたときには、車椅子を押して歩けるぐらいに回復されていました。

四、Ｔさんは、山城町以来、ずっと『こころのとも』を講読して下さいる方で、はじめてお会いしたころは、何回も何回も繰り返し読んでいる、とのことでした。五、今回お会いしてお話してましたら、今でも五回は読むとのこと。思わず、感謝して手を合わせました。

六、訪問しました特別養護老人ホームについての印象ですが、とても豪勢で贅沢ではないかと思えるほど立派で

した。Ｔさんも、今までで一番、よく出来ているし、世話をして下さいる人も、親切だと言われていました。私の印象でも、とてもサービスピス精神がある人ばかりでした。私が、Ｔさんと立ってお話してましたら、椅子をホルからとつて来てくださったりしました。

七、Ｔさんは、とても顔の血色も表情もよく、生き生きとしておられました。どう見ても九十歳とは思えませんでした。今も、毎日々々、必ず、お経を唱えられるそうです。なるほど、と感心もし、納得もしました。

八、帰り道、来てよかつたとつくづく思うと共に、いつまでもお元気で、と祈らずにはおれませんでした。

月刊 こころのとも 第九卷 四月号 (通巻 一 号)	平成十年四月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

